

貯 法：室温保存  
有効期間：3年

## 抗てんかん剤

ラコサミドドライシロップ

## ラコサミド DS10%「アメル」

Lacosamide Dry Syrup 「AMEL」

劇薬

処方箋医薬品

注意－医師等の処方箋により使用すること

承認番号 30700AMX00167

販売開始

## 2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

- 2.1 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者  
2.2 重度の肝機能障害のある患者[9.3.1、16.6.3 参照]

## 3. 組成・性状

## 3.1 組成

|      |                                                    |
|------|----------------------------------------------------|
| 販売名  | ラコサミド DS10%「アメル」                                   |
| 有効成分 | 1g 中、ラコサミド 100mg を含有する。                            |
| 添加剤  | D-マンニトール、クロスポビドン、スクラロース、ヒドロキシプロピルセルロース、含水二酸化ケイ素、香料 |

## 3.2 製剤の性状

|     |                  |
|-----|------------------|
| 販売名 | ラコサミド DS10%「アメル」 |
| 剤形  | ドライシロップ剤         |
| 色調  | 白色～微黄白色          |

## 4. 効能又は効果

てんかん患者の部分発作（二次性全般化発作を含む）

## 6. 用法及び用量

成人：通常、成人にはラコサミドとして 1 日 100mg（ドライシロップとして 1g）より投与を開始し、その後 1 週間以上の間隔をあけて増量し、維持用量を 1 日 200mg（ドライシロップとして 2g）とするが、いずれも 1 日 2 回に分けて用時懸濁して経口投与する。なお、症状により 1 日 400mg（ドライシロップとして 4g）を超えない範囲で適宜増減するが、増量は 1 週間以上の間隔をあけて 1 日用量として 100mg（ドライシロップとして 1g）以下ずつ行うこと。

小児：通常、4 歳以上の小児にはラコサミドとして 1 日 2mg/kg（ドライシロップとして 20mg/kg）より投与を開始し、その後 1 週間以上の間隔をあけて 1 日用量として 2mg/kg（ドライシロップとして 20mg/kg）ずつ増量し、維持用量を体重 30kg 未満の小児には 1 日 6mg/kg（ドライシロップとして 60mg/kg）、体重 30kg 以上 50kg 未満の小児には 1 日 4mg/kg（ドライシロップとして 40mg/kg）とする。いずれも 1 日 2 回に分けて用時懸濁して経口投与する。なお、症状により体重 30kg 未満の小児には 1 日 12mg/kg（ドライシロップとして 120mg/kg）、体重 30kg 以上 50kg 未満の小児には 1 日 8mg/kg（ドライシロップとして 80mg/kg）を超えない範囲で適宜増減するが、増量は 1 週間以上の間隔をあけて 1 日用量として 2mg/kg（ドライシロップとして 20mg/kg）以下ずつ行うこと。ただし、体重 50kg 以上の小児では、成人と同じ用法・用量を用いること。

## 7. 用法及び用量に関連する注意

7.1 クレアチニンクリアランスが 30mL/min 以下の重度及び末期腎機能障害のある患者には、成人は 1 日最高用量を 300mg、小児は 1 日最高用量を 25%減量とするなど慎重に投与すること。また、血液透析を受けている患者では、1 日用量に加えて、血液透析後に最大で 1 回用量の半量の追加投与を考慮すること。[9.2.1、9.2.2、16.1.2、16.6.1、16.6.2 参照]

7.2 軽度又は中等度の肝機能障害のある患者（Child-Pugh 分類 A 及び B）には、成人は 1 日最高用量を 300mg、小児は

1 日最高用量を 25%減量とするなど慎重に投与すること。[9.3.2、16.6.3 参照]

7.3 本剤の 1 日最高用量は体重 30kg 未満の小児では 1 日 12mg/kg、体重 30kg 以上 50kg 未満の小児では 1 日 8mg/kg である。本剤を 1 日 8mg/kg を超えて投与している体重 30kg 未満の小児が、成長に伴い安定的に体重が 30kg 以上となった場合には、患者の状態を十分に観察し、効果及び副作用の発現を考慮したうえで、適切な用量を検討すること。なお、急激な減量は避けること。

## 8. 重要な基本的注意

8.1 連用中における投与量の急激な減量ないし投与中止により、てんかん発作の増悪又はてんかん重積状態があらわれることがあるので、投与を中止する場合には、少なくとも 1 週間以上かけて徐々に減量するなど慎重に行うこと。

8.2 浮動性めまい、霧視、眠気、注意力・集中力・反射運動能力等の低下が起こることがあるので、本剤投与中の患者には自動車の運転等、危険を伴う機械の操作に従事させないように注意すること。

8.3 PR 間隔の延長があらわれることがあるので、本剤の投与中は第二度以上の房室ブロック等に関連する症状（頻脈、脈拍数減少、脈拍不整、頭部ふらふら感、失神、動悸、息切れ等）の発現に注意すること。本剤の投与中にそのような症状があらわれた場合には、医師の診察を受けるよう患者及びその家族等に指導すること。心伝導障害や重度の心疾患（心筋梗塞又は心不全等）の既往のある患者、ナトリウムチャンネル異常（ブルガダ症候群等）のある患者、PR 間隔の延長を起こすおそれのある薬剤を併用している患者等では、本剤投与開始時及び本剤投与中は心電図検査を行うなど、患者の状態及び病態の変化を注意深く観察すること。[9.1.1、10.2、11.1.1 参照]

8.4 易刺激性、興奮、攻撃性等の精神症状があらわれ、自殺企図に至ることもあるので、本剤投与中は患者の状態及び病態の変化を注意深く観察すること。[8.5、15.1 参照]

8.5 患者及びその家族等に攻撃性、自殺企図等の精神症状発現の可能性について十分説明を行い、医師と緊密に連絡を取り合うよう指導すること。[8.4、15.1 参照]

8.6 複視、霧視等の眼障害が生じる可能性があるため、診察時に、眼障害について問診を行う等注意し、異常が認められた場合には適切な処置を行うこと。[15.2.1 参照]

## 9. 特定の背景を有する患者に関する注意

## 9.1 合併症・既往歴等のある患者

9.1.1 心伝導障害や重度の心疾患（心筋梗塞又は心不全等）の既往のある患者、ナトリウムチャンネル異常（ブルガダ症候群等）のある患者

本剤の PR 間隔延長作用により房室ブロック等が発現するおそれがある。[8.3、10.2、11.1.1 参照]

## 9.2 腎機能障害患者

## 9.2.1 重度腎機能障害のある患者

[7.1、16.6.1 参照]

## 9.2.2 血液透析を受けている末期腎機能障害患者

[7.1、16.6.2 参照]

## 9.3 肝機能障害患者

## 9.3.1 重度の肝機能障害のある患者

投与しないこと。本剤の血中濃度が上昇するおそれがある。[2.2、16.6.3 参照]

### 9.3.2 軽度又は中等度の肝機能障害のある患者（Child-Pugh 分類 A 及び B）

[7.2、16.6.3 参照]

### 9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。ラットにおいて胎児移行性が認められている。

### 9.6 授乳婦

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中止を検討すること。ヒト乳汁中へ移行することが報告されている。

### 9.7 小児等

9.7.1 低出生体重児、新生児、乳児又は4歳未満の幼児に対する臨床試験は実施していない。

9.7.2 小児患者の部分発作に対する単剤療法に関する臨床試験は国内・海外ともに行われていない。

### 9.8 高齢者

一般に高齢者では生理機能が低下している。[16.6.4 参照]

## 10. 相互作用

### 10.2 併用注意（併用に注意すること）

| 薬剤名等                                               | 臨床症状・措置方法           | 機序・危険因子                         |
|----------------------------------------------------|---------------------|---------------------------------|
| PR 間隔の延長を起こすおそれのある薬剤<br>[ 8.3 、 9.1.1 、 11.1.1 参照] | 房室ブロック等が発現するおそれがある。 | 併用により PR 間隔延長作用が相加的に増強するおそれがある。 |

## 11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

### 11.1 重大な副作用

#### 11.1.1 房室ブロック、徐脈、失神（いずれも1%未満）

PR 間隔の延長を起こすおそれがある。[8.3、9.1.1、10.2 参照]

#### 11.1.2 中毒性表皮壊死融解症（Toxic Epidermal Necrolysis: TEN）、皮膚粘膜眼症候群（Stevens-Johnson 症候群）（いずれも頻度不明）

発熱、紅斑、水疱・びらん、そう痒、咽頭痛、眼充血、口内炎等の異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

#### 11.1.3 薬剤性過敏症症候群（頻度不明）

初期症状として発疹、発熱がみられ、更に肝機能障害、リンパ節腫脹、白血球増加、好酸球増多、異型リンパ球出現等を伴う遅発性の重篤な過敏症状があらわれることがある。なお、ヒトヘルペスウイルス6（HHV-6）等のウイルスの再活性化を伴うことが多く、投与中止後も発疹、発熱、肝機能障害等の症状が再燃あるいは遷延化することがあるので注意すること<sup>1)</sup>。

#### 11.1.4 無顆粒球症（頻度不明）

### 11.2 その他の副作用

|       | 3%以上                | 1～3%未満       | 1%未満                                                                               | 頻度不明        |
|-------|---------------------|--------------|------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 精神神経系 | 浮動性めまい（17.8%）、頭痛、傾眠 | 記憶障害、振戦、運動失調 | うつ病、幻覚、攻撃性、激越、感覚鈍麻、錯感覚、認知障害、異常行動、錯乱状態、注意力障害、平衡障害、不眠症、眼振、構語障害、嗜眠、協調運動異常、ミオクロヌス性てんかん | 精神病性障害、多幸気分 |
| 眼     |                     | 複視、霧視        |                                                                                    |             |

|        | 3%以上  | 1～3%未満    | 1%未満                     | 頻度不明 |
|--------|-------|-----------|--------------------------|------|
| 血液     |       | 白血球数減少    |                          |      |
| 消化器    | 悪心、嘔吐 | 下痢        | 消化不良、口内乾燥、鼓腸、便秘          |      |
| 循環器    |       |           | 心房細動                     | 心房粗動 |
| 肝臓     |       | 肝機能異常     |                          |      |
| 代謝及び栄養 |       | 食欲減退      |                          |      |
| 皮膚     |       |           | 発疹、蕁麻疹、そう痒症              | 血管浮腫 |
| 免疫系    |       |           | 薬物過敏症                    |      |
| 筋骨格系   |       |           | 筋痙縮                      |      |
| 感覚器    |       | 回転性めまい    | 耳鳴                       |      |
| その他    | 疲労    | 歩行障害、易刺激性 | 転倒、挫傷、裂傷、鼻咽頭炎、発熱、無力症、酩酊感 | 咽頭炎  |

## 13. 過量投与

### 13.1 症状

過量投与（最大12000mg）により認められた主な症状は、浮動性めまい、悪心、発作（全般性強直間代発作、てんかん重積状態）、心伝導障害、ショック及び昏睡であった。また、ラコサミド7000mgを一度に服用した例で死亡が報告されている。

### 13.2 処置

本剤は血液透析により除去可能であり、発現している症状の程度に応じて血液透析の実施を考慮すること。[16.6.2 参照]

## 15. その他の注意

### 15.1 臨床使用に基づく情報

海外で実施された複数の抗てんかん薬における、てんかん、精神疾患等を対象とした199のプラセボ対照臨床試験の検討結果において、自殺念慮及び自殺企図の発現のリスクが、抗てんかん薬の服用群でプラセボ群と比較して約2倍高く（抗てんかん薬服用群：0.43%、プラセボ群：0.24%）、抗てんかん薬の服用群では、プラセボ群と比べ1000人あたり1.9人多いと計算された（95%信頼区間：0.6-3.9）。また、てんかん患者のサブグループでは、プラセボ群と比べ1000人あたり2.4人多いと計算されている。[8.4、8.5 参照]

### 15.2 非臨床試験に基づく情報

15.2.1 非臨床薬物動態試験において、ラコサミドはラットの水晶体に投与後35日目まで分布したが、ラットの26週間及び104週間反復投与毒性試験で眼に異常は認められず、イヌの52週間反復投与毒性試験において水晶体の変化は認められなかった。複視、霧視等の眼に関する副作用の発現率はプラセボ群より高く、16週間投与の日中共同第III相試験のプラセボ群では1.6%に対し、本剤200mg/日群で4.9%、400mg/日群で12.2%、長期投与では5.5%であり、海外第III相試験（併合成績）のプラセボ群では4.4%に対し、本剤200mg/日群で8.9%、400mg/日群で18.0%、600mg/日群で30.5%であった。[8.6 参照]

15.2.2 欠神発作モデルであるWAG/Rijラット（3、10及び30mg/kgを腹腔内投与）及びストラスプール遺伝性欠神てんかんラット（15.6及び31.2mg/kgを腹腔内投与）において、欠神発作の増悪が認められた。

## 16. 薬物動態

### 16.1 血中濃度

#### 16.1.1 成人

##### (1) 単回投与

健康成人男性18例にラコサミド100、200、400mgを空腹時に単回経口投与したとき、投与後0.5～4時間でCmaxに達

し、 $T_{1/2}$  は約 14 時間であった。AUC 及び  $C_{max}$  は投与量に比例して増加した<sup>2)</sup>。

単回投与時の薬物動態パラメータ

| 投与量                                                      | 100mg               | 200mg               | 400mg               |
|----------------------------------------------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 例数                                                       | 12                  | 11                  | 12                  |
| $AUC_{0-\infty}$<br>( $\mu\text{g} \cdot \text{hr/mL}$ ) | 57.0 [20.4]         | 116.4 [18.2]        | 219.1 [16.1]        |
| $AUC_{0-t}$<br>( $\mu\text{g} \cdot \text{hr/mL}$ )      | 55.0 [18.7]         | 112.1 [17.1]        | 212.5 [15.0]        |
| $C_{max}$ ( $\mu\text{g/mL}$ )                           | 2.96 [15.2]         | 5.84 [25.0]         | 11.8 [15.4]         |
| $T_{max}$ (hr)                                           | 1.00<br>(0.50-4.00) | 1.00<br>(0.25-1.50) | 1.00<br>(0.50-4.00) |
| $T_{1/2}$ (hr)                                           | 14.0 [20.2]         | 14.6 [13.0]         | 13.7 [15.3]         |
| CL/F (L/hr)                                              | 1.75 [20.4]         | 1.72 [18.2]         | 1.83 [16.1]         |
| Vd/F (L)                                                 | 35.5 [13.4]         | 36.3 [13.0]         | 36.2 [12.8]         |

幾何平均値 [CV (%)]、 $T_{max}$  は中央値 (範囲)

## (2) 反復投与

健康成人男性 5 例にラコサミド 200mg/回を 1 日 2 回 7 日間反復経口投与したとき、血漿中ラコサミド濃度は投与開始から 3 日後に定常状態に到達した。 $AUC_{0-12\text{hr}}$  の累積係数は 2.4 であった<sup>3)</sup> (外国人データ)。

### 16.1.2 小児

非盲検 3 試験及び二重盲検 1 試験において 6 ヶ月<sup>注 1)</sup> から 17 歳までの小児てんかん患者 414 例 (日本人 46 例を含む) から得られた血漿中ラコサミド濃度を用いて母集団薬物動態解析を行い、小児におけるラコサミドの薬物動態パラメータを推定した。本解析におけるラコサミドの投与量は 2~12mg/kg/日を 1 日 2 回投与 (体重 50kg 以上の小児での最高用量は 600mg/日<sup>注 2)</sup>) であった。見かけの分布容積 (Vd/F) は 0.71L/kg、見かけの全身クリアランス (CL/F) は体重及び年齢に依存し、体重 15kg の 4 歳児で 0.88L/hr (0.058L/hr/kg)、体重 25kg の 8 歳児で 1.18L/hr (0.047L/hr/kg)、体重 40kg の 12 歳児で 1.60L/hr (0.040L/hr/kg)、体重 50kg の 16 歳児で 1.83L/hr (0.037L/hr/kg) と推定された<sup>4)</sup>。[7.1 参照]

注 1) 本剤は 4 歳以上の小児に対して適用を有している。

注 2) 本剤の承認された 1 日最高用量は、成人及び体重 50kg 以上の小児には 400mg、体重 30kg 以上 50kg 未満の小児には 8mg/kg、体重 30kg 未満の小児には 12mg/kg である。

### 16.1.3 生物学的同等性

健康成人男性 24 例にラコサミド 100mg (ドライシロップ 10% を 1g 又は 100mg 錠を 1 錠) を空腹時単回投与したとき、ラコサミドの薬物動態パラメータは以下のとおりであった。ドライシロップ 10% と 100mg 錠の生物学的同等性が確認された<sup>5)</sup>。

単回投与時の薬物動態パラメータ

| 薬物動態パラメータ                                           | ドライシロップ 10%<br>(例数=24) | 100mg 錠<br>(例数=24)  | 幾何平均の比 <sup>a)</sup><br>(90%信頼区間) |
|-----------------------------------------------------|------------------------|---------------------|-----------------------------------|
| $C_{max}$<br>( $\mu\text{g/mL}$ )                   | 4.46 [23.5]            | 4.24 [29.5]         | 1.05<br>(0.93-1.19)               |
| $AUC_{0-t}$<br>( $\mu\text{g} \cdot \text{hr/mL}$ ) | 56.2 [14.7]            | 56.0 [15.7]         | 1.00<br>(0.99-1.02)               |
| $T_{max}$<br>(hr)                                   | 0.25<br>(0.25-0.75)    | 0.50<br>(0.25-3.00) | -                                 |

$C_{max}$  及び  $AUC_{0-t}$  は幾何平均値 [CV (%)]

$T_{max}$  は中央値 (範囲)

a) ドライシロップ/錠

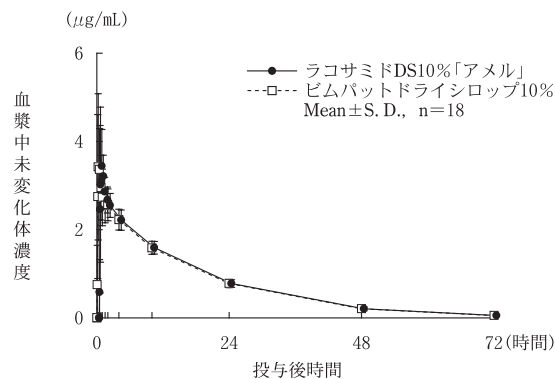
### 16.1.4 生物学的同等性試験

ラコサミド DS10%「アメル」とビムパットドライシロップ 10% を、クロスオーバー法によりそれぞれ 1g (ラコサミドとして 100mg) 健康成人男子に絶食単回経口投与して血漿中ラコサミド未変化体濃度を測定し、得られた薬物動態パラメータ (AUC、 $C_{max}$ ) について 90% 信頼区間法にて統計解析を行った結果、 $\log(0.80) \sim \log(1.25)$  の範囲内であり、両剤の生物学的同等性が確認された<sup>6)</sup>。

薬物動態パラメータ (生物学的同等性)

|                  | 判定パラメータ                                            |                                   | 参考パラメータ           |                   |
|------------------|----------------------------------------------------|-----------------------------------|-------------------|-------------------|
|                  | AUC (0~72)<br>( $\mu\text{g} \cdot \text{hr/mL}$ ) | $C_{max}$<br>( $\mu\text{g/mL}$ ) | $T_{max}$<br>(hr) | $T_{1/2}$<br>(hr) |
| ラコサミド DS10%「アメル」 | 53.19 ± 4.88                                       | 4.06 ± 0.98                       | 0.45 ± 0.21       | 12.65 ± 1.33      |
| ビムパットドライシロップ 10% | 53.11 ± 5.17                                       | 4.19 ± 0.93                       | 0.44 ± 0.43       | 12.74 ± 1.35      |

(Mean ± S.D., n = 18)



血漿中未変化体濃度 (生物学的同等性)

血漿中濃度並びに AUC、 $C_{max}$  等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

## 16.2 吸収

### 16.2.1 食事の影響

健康成人男性 24 例にラコサミド 300mg を空腹時又は食後に単回経口投与したとき、食事はラコサミドの  $AUC_{0-t}$  及び  $C_{max}$  に影響を及ぼさなかった<sup>7)</sup> (外国人データ)。

### 16.2.2 バイオアベイラビリティ

健康成人 24 例にラコサミド 200mg を 30 及び 60 分間で単回点滴静脈内投与又は単回経口投与したとき、ラコサミドの  $AUC_{0-t}$  及び  $C_{max}$  は同程度であり、ラコサミド錠の絶対バイオアベイラビリティはほぼ 100% であった<sup>8)</sup>。

## 16.3 分布

健康成人 24 例にラコサミド 200mg を 30 分間で単回点滴静脈内投与したとき、分布容積 (Vd) は 31.1L であり、ラコサミド 200mg を単回経口投与したとき、見かけの分布容積 (Vd/F) は 32.8L であった。

*in vitro* (ラコサミド 1.5~60  $\mu\text{g/mL}$ ) 及び *ex vivo* (ラコサミド 0.7~5.5  $\mu\text{g/mL}$ ) 試験の結果、ラコサミドの血漿蛋白結合率は 15% 未満であった<sup>8),9)</sup>。

## 16.4 代謝

ラコサミドは腎排泄及び代謝により体内から消失した。

*in vitro* 試験の結果、薬理学的に不活性な主代謝物である O-脱メチル体生成に主に寄与する CYP 分子種は、CYP3A4、CYP2C9 及び CYP2C19 であった<sup>10),11)</sup>。

## 16.5 排泄

**16.5.1 健康成人男性各 5 例に** [ $^{14}\text{C}$ ] -ラコサミド 100mg (40  $\mu\text{Ci}$ ) を単回経口投与及び 1 時間で単回点滴静脈内投与したとき、投与後 168 時間までに、尿中に投与量の 94% 及び 97% が排泄され、糞中への排泄は 0.5% 未満であった。尿中へはラコサミド (約 30~40%)、O-脱メチル体 (約 30%)、極性画分 (約 20%) 及び他の微量な代謝物 (0.5~2%) として排泄された<sup>10),12)</sup> (外国人データ)。

**16.5.2 健康成人男性に**ラコサミド 100~400mg を単回経口投与したとき、投与 72 時間後までの尿中排泄率は、ラコサミド 29~33%、O-脱メチル体 10~15% であった。血漿中 O-脱メチル体の  $AUC_{0-t}$  は血漿中ラコサミドの約 10% であった<sup>2)</sup>。

**16.5.3 健康成人に**ラコサミド 200mg を 30 分間で単回点滴静脈内投与したとき、全身クリアランス (CL) は 1.78L/hr であり、ラコサミド 200mg を単回経口投与したとき、見かけの全身クリアランス (CL/F) は 1.84L/hr であった<sup>8)</sup>。

## 16.6 特定の背景を有する患者

### 16.6.1 腎機能障害患者

腎機能の程度の異なる成人被験者にラコサミド 100mg を単回経口投与したとき、 $AUC_{0-t}$  は腎機能正常者 (CL<sub>CR</sub> :

≥80mL/min)と比較して、軽度低下者 (CL<sub>CR</sub>: 50~<80mL/min)では27%、中等度低下者 (CL<sub>CR</sub>: 30~<50mL/min)で22%、重度低下者 (CL<sub>CR</sub>: <30mL/min)で59%高く、C<sub>max</sub>は軽度から重度の腎機能低下者で10~14%高かった。軽度から重度の腎機能低下者におけるO-脱メチル体のAUC<sub>0-t</sub>は腎機能正常者の1.5~4.6倍であった<sup>13)</sup>(外国人データ)。<sup>[7.1、9.2.1 参照]</sup>

単回投与時の薬物動態パラメータ

| 腎機能                           | 正常               | 軽度低下             | 中等度低下                         | 重度低下             |
|-------------------------------|------------------|------------------|-------------------------------|------------------|
| 例数                            | 8                | 8                | 8                             | 8                |
| CL <sub>CR</sub> (mL/min)     | ≥80              | 50~<80           | 30~<50                        | <30              |
| AUC <sub>0-t</sub> (μg・hr/mL) | 47.0<br>[20.8]   | 59.6<br>[17.5]   | 57.6<br>[19.0]                | 74.8<br>[26.9]   |
| C <sub>max</sub> (μg/mL)      | 2.69<br>[35.0]   | 2.95<br>[20.7]   | 3.06<br>[10.0]                | 3.02<br>[23.3]   |
| T <sub>max</sub> (hr)         | 1.0<br>(0.5-2.0) | 0.5<br>(0.5-1.0) | 0.5<br>(0.5-1.0)              | 1.0<br>(0.5-1.5) |
| T <sub>1/2</sub> (hr)         | 13.2<br>[17.6]   | 18.2<br>[18.7]   | 15.4<br>[18.9]                | 18.3<br>[27.8]   |
| CL/F (L/hr)                   | 2.13<br>[20.8]   | 1.68<br>[17.5]   | 1.74<br>[19.0]                | 1.34<br>[26.9]   |
| CL <sub>R</sub> (L/hr)        | 0.590<br>[37.9]  | 0.354<br>[51.3]  | 0.277 <sup>a)</sup><br>[24.4] | 0.143<br>[31.8]  |

幾何平均値[CV(%)]、AUC<sub>0-t</sub>は0~96時間値、T<sub>max</sub>は中央値(範囲)  
CL<sub>R</sub>: 腎クリアランス

a) 7例

#### 16.6.2 血液透析を受けている末期腎機能障害患者

血液透析を受けている末期腎機能障害の成人被験者に、非透析時及び透析開始2.5時間前にラコサミド100mgを単回経口投与したとき、非透析時に比べ4時間の透析実施時ではラコサミドのAUC<sub>0-t</sub>は46%減少し、透析による除去効率はラコサミド57%、O-脱メチル体53%であり、透析クリアランスはラコサミド140mL/min(8.40L/hr)、O-脱メチル体149mL/min(8.94L/hr)であった<sup>13)、14)</sup>(外国人データ)。<sup>[7.1、9.2.2、13.2 参照]</sup>

単回投与時の薬物動態パラメータ

| 血液透析                          | 非透析時           | 4時間透析時         |
|-------------------------------|----------------|----------------|
| 例数                            | 8              | 8              |
| ラコサミド                         |                |                |
| AUC <sub>0-t</sub> (μg・hr/mL) | 43.2 [20.2]    | 23.2 [15.1]    |
| C <sub>max</sub> (μg/mL)      | 3.18 [22.4]    | 2.79 [22.1]    |
| T <sub>max</sub> (hr)         | 0.50 (0.5-4.0) | 0.75 (0.5-2.0) |
| T <sub>1/2</sub> (hr)         | 19.6 [19.4]    | 19.2 [26.8]    |
| O-脱メチル体                       |                |                |
| AUC <sub>0-t</sub> (μg・hr/mL) | 6.63 [74.3]    | 3.43 [68.5]    |
| C <sub>max</sub> (μg/mL)      | 0.48 [69.5]    | 0.22 [69.1]    |

幾何平均値[CV(%)]、AUC<sub>0-t</sub>は0~24時間値、T<sub>max</sub>は中央値(範囲)

#### 16.6.3 肝機能障害患者

肝機能が中等度に低下した成人 (Child-Pugh 分類 B) にラコサミド100mg/回を1日2回5日間反復経口投与したとき、健康成人に比べてラコサミドの定常状態のAUC<sub>0-12hr</sub>及びC<sub>max</sub>はそれぞれ61%及び50%高かった。また、体重で基準化した定常状態のAUC<sub>0-12hr</sub>及びC<sub>max</sub>はそれぞれ47%及び37%高かった。重度肝機能障害患者 (Child-Pugh 分類 C) での薬物動態は検討していない<sup>15)</sup>(外国人データ)。<sup>[2.2、7.2、9.3.1、9.3.2 参照]</sup>

定常状態の薬物動態パラメータ

| 肝機能                              | 正常            | Child-Pugh 分類 B |
|----------------------------------|---------------|-----------------|
| 例数                               | 8             | 8               |
| AUC <sub>0-12hr</sub> (μg・hr/mL) | 53.3 [17.3]   | 85.9 [21.7]     |
| C <sub>max</sub> (μg/mL)         | 5.83 [13.3]   | 8.75 [18.7]     |
| T <sub>max</sub> (hr)            | 1.5 (0.5-2.0) | 1.5 (0.5-2.0)   |
| T <sub>1/2</sub> (hr)            | 14.8 [19.7]   | 24.1 [23.5]     |

幾何平均値[CV(%)]、T<sub>max</sub>は中央値(範囲)

#### 16.6.4 高齢者

65歳以上の高齢男性11例及び高齢女性12例にラコサミド100mg/回を1日2回5日間反復経口投与したとき、45歳以下の成人男性12例と比較して、高齢男性及び女性においてラコサミドの定常状態のAUC<sub>0-12hr</sub>はそれぞれ33%及び50%高く、C<sub>max</sub>はそれぞれ29%及び53%高かった。また、体重で基準化したAUC<sub>0-12hr</sub>は高齢男性及び女性においてそれぞれ26%及び23%高かった<sup>16)、17)</sup>(外国人データ)。<sup>[9.8 参照]</sup>

#### 16.6.5 CYP2C19 遺伝子多型

日本人及び中国人健康成人男性各18例を、CYP2C19 遺伝子型に基づく代謝能分類により、急速代謝能者 (UM) 1例、高代謝能者 (EM) 17例、中間代謝能者 (IM) 10例、及び低代謝能者 (PM) 8例に分け、この集団にラコサミド100~400mgを単回経口投与したとき、ラコサミドの投与量及び体重で基準化したAUC<sub>0-∞</sub>は、EMに比べてPMで24%、IMで10%高かった<sup>2)</sup>。

#### 16.7 薬物相互作用

##### 16.7.1 薬物相互作用試験

ラコサミドは、治療血漿中濃度域でCYP1A2、2B6、2C9、2C19及び3A4に対して誘導作用を示さず、CYP1A1、1A2、2A6、2B6、2C8、2C9、2D6、2E1、3A4及び3A5に対して阻害作用を示さなかったが、CYP2C19に対する阻害作用が示唆された。

ラコサミドは、P-糖蛋白質の典型的な基質ではなく、P-糖蛋白質に対して阻害作用を示さなかった<sup>18)</sup> (*in vitro*)。

##### 16.7.2 臨床薬物相互作用試験

###### (1) カルバマゼピン

健康成人男性19例に、ラコサミド(200mg/回、1日2回)の定常状態において、強いCYP3A誘導薬及び中程度のCYP2C9誘導薬であるカルバマゼピン(200mg/回、1日2回)を併用反復経口投与したとき、カルバマゼピンはラコサミドの定常状態のAUC<sub>0-12hr</sub>及びC<sub>max</sub>に影響を及ぼさなかった。健康成人男性18例に、カルバマゼピン(200mg/回、1日2回)の定常状態において、ラコサミド(200mg/回、1日2回)を併用反復経口投与したとき、ラコサミドはカルバマゼピンの定常状態のAUC<sub>0-12hr</sub>及びC<sub>max</sub>に影響を及ぼさなかった<sup>19)</sup>(外国人データ)。

###### (2) オメプラゾール

健康成人男性34例に、ラコサミド(300mg)の単回経口投与において、弱いCYP2C19阻害薬であるオメプラゾール(40mg/回、1日1回)を併用反復経口投与したとき、オメプラゾールはラコサミドのAUC<sub>0-t</sub>及びC<sub>max</sub>に影響を及ぼさなかった。CYP2C19基質であるオメプラゾール(40mg)の単回経口投与において、ラコサミド(300mg/回、1日2回)を併用反復経口投与したとき、ラコサミドはオメプラゾールのAUC<sub>0-t</sub>及びC<sub>max</sub>に影響を及ぼさなかった<sup>20)</sup>(外国人データ)。

###### (3) ミダゾラム

健康成人男性33例に、CYP3A基質であるミダゾラム(7.5mg)の単回経口投与において、ラコサミド(200mg/回、1日2回)を併用反復経口投与したとき、ラコサミドはミダゾラムのC<sub>max</sub>を30%増加させたがAUC<sub>0-t</sub>に影響を及ぼさなかった<sup>21)</sup>(外国人データ)。

###### (4) ワルファリン

健康成人男性16例に、S-ワルファリンがCYP2C9基質であるワルファリン(25mg)の単回経口投与において、ラコサミド(200mg/回、1日2回)を併用反復経口投与したとき、ラコサミドはS及びR-ワルファリンのAUC<sub>0-t</sub>及びC<sub>max</sub>に影響を及ぼさず、プロトロンビン時間及びプロトロンビン

時間の国際標準比（INR）の最大値及び AUC<sub>0-168hr</sub> に影響を及ぼさなかった<sup>22)</sup>（外国人データ）。

### 16.7.3 母集団薬物動態解析

日本人及び外国人の成人及び小児のてんかん患者から得られた血漿中ラコサミド濃度データを用いて、母集団薬物動態解析を行った。その結果、CYP 誘導作用を有する抗てんかん薬であるカルバマゼピン、フェニトイン又はフェノバルビタールの併用により、ラコサミドの定常状態の AUC は、成人及び小児で、各々 25%及び 17%減少した<sup>4),23)</sup>。

## 17. 臨床成績

### 17.1 有効性及び安全性に関する試験

#### 17.1.1 国際共同第Ⅲ相試験（単剤療法、成人）

新規に又は最近てんかんと診断された部分発作（二次性全般化発作を含む）又は未分類の全般性強直間代発作を有する 16 歳以上の患者を対象として、ラコサミド錠 200～600mg/日<sup>注 1)</sup>又はカルバマゼピン徐放錠（CBZ-CR）400～1200mg/日<sup>注 2)</sup>を単剤にて経口投与したとき、主要評価項目である Kaplan-Meier 法により推定した最終評価用量における 6 ヶ月間発作消失率は下表のとおりであり、群間差の 95%信頼区間の下限値は予め設定された非劣性限界値（-12%）を上回ったこと、CBZ-CR 群の 6 ヶ月間発作消失率に対する群間差の 95%信頼区間の下限値の比（相対差）は、予め設定した非劣性限界値（-20%）を上回ったことから、CBZ-CR に対するラコサミド錠の非劣性が確認された<sup>24)</sup>。

| 解析対象集団            | 投与群      | 例数                | 発作が消失した患者数（割合（%）） | 発作消失率（%）<br>[95%信頼区間] <sup>a)</sup> | 群間差（%）<br>[95%信頼区間] <sup>a) b)</sup> | 相対差（%） <sup>c)</sup> |
|-------------------|----------|-------------------|-------------------|-------------------------------------|--------------------------------------|----------------------|
| FAS <sup>d)</sup> | ラコサミド錠群  | 444 <sup>f)</sup> | 327<br>(73.6)     | 89.8<br>[86.8, 92.8]                | -1.3<br>[-5.5, 2.8]                  | -6.0                 |
|                   | CBZ-CR 群 | 442 <sup>g)</sup> | 308<br>(69.7)     | 91.1<br>[88.2, 94.0]                |                                      |                      |
| PPS <sup>e)</sup> | ラコサミド錠群  | 408               | 307<br>(75.2)     | 91.5<br>[88.6, 94.3]                | -1.3<br>[-5.3, 2.7]                  | -5.7                 |
|                   | CBZ-CR 群 | 397               | 285<br>(71.8)     | 92.8<br>[90.0, 95.5]                |                                      |                      |

a) Kaplan-Meier 法による推定値（過去 3 ヶ月間の発作回数（2 回以下、3 回以上）を層として Mantel-Haenszel 法により調整）

b) ラコサミド錠群の消失率 - CBZ-CR 群の消失率

c) 消失率の群間差の 95%信頼区間の下限値/CBZ-CR 群の消失率 × 100

d) Full Analysis Set

e) Per Protocol Set

f) 日本人症例 7 例を含む

g) 日本人症例 13 例を含む

なお、事後解析結果によるラコサミド錠群で 400mg/日超への増量が必要となった患者を効果不十分例として扱った場合の FAS における発作が消失した患者数（割合（%））は 308<sup>注 3)</sup>/444 例（69.4%）であり、Kaplan-Meier 法により推定した発作消失率 [95%信頼区間] は 84.1% [80.5, 87.6] であった。

副作用発現頻度は、ラコサミド錠群で 37.2%（165/444 例）であった。主な副作用は、浮動性めまい 7.9%（35/444 例）、疲労 5.6%（25/444 例）、傾眠 4.5%（20/444 例）であった。

注 1) 本剤の承認された 1 日最高用量は 400mg である。

注 2) カルバマゼピン徐放錠は本邦では承認されていない。

注 3) 200～400mg/日投与で発作が消失した患者数。

#### 17.1.2 国内第Ⅲ相試験（単剤療法、成人）

1 剤の既存の抗てんかん薬を投与している 16 歳以上の部分発作を有するてんかん患者を対象として、ラコサミド錠 200～600mg/日<sup>注 4)</sup>経口投与による単剤療法へ切り替えたとき、6 ヶ月間発作消失患者の割合は 46.2%（6/13 例）であった<sup>25)</sup>。副作用発現頻度は、84.2%（16/19 例）であった。主な副作用は、浮動性めまい 42.1%（8/19 例）、傾眠 31.6%（6/19 例）、回転性めまい、悪心が各 10.5%（2/19 例）であった。

注 4) 本剤の承認された 1 日最高用量は 400mg である。

#### 17.1.3 国際共同第Ⅲ相試験（併用療法、成人）

既存の抗てんかん薬で十分な発作抑制効果が得られない部分発作を有する 16 歳以上の日本人及び中国人のてんかん患者 547 例（日本人患者 142 例を含む）を対象として、ラコサミド錠 200、400mg/日又はプラセボを 16 週間経口投与（既存の抗てんかん薬 1～3 剤との併用）したとき、主要評価項目である観察期間に対する維持期間の 28 日あたりの部分発作回数変化量は下表のとおりであり、プラセボ群とラコサミド錠 200mg/日及び 400mg/日群との間で統計学的に有意な差が認められた。なお、各群における 50%レスポンス率（28 日あたりの部分発作回数が観察期間と比べて 50%以上改善した患者の割合）は、プラセボ群 19.7%（36/183 例）、ラコサミド錠 200mg/日群 38.5%（70/182 例）及びラコサミド錠 400mg/日群 49.2%（88/179 例）であった<sup>26)</sup>。

|          | 例数 <sup>a)</sup> | 28 日あたりの部分発作回数の変化量 <sup>b)</sup> | p 値 <sup>c)</sup> | プラセボ群に対する減少率 <sup>d)</sup><br>[95%信頼区間] |
|----------|------------------|----------------------------------|-------------------|-----------------------------------------|
| プラセボ群    | 183              | -1.22                            |                   |                                         |
| 200mg/日群 | 182              | -3.33                            | <0.001            | 29.4<br>[18.7, 38.7]                    |
| 400mg/日群 | 179              | -4.50                            | <0.001            | 39.6<br>[30.5, 47.6]                    |

a) Full Analysis Set

b) 中央値

c) 対数変換した維持期間の 28 日あたりの部分発作回数を反応変数、投与群及び国を因子、対数変換した観察期間の 28 日あたりの部分発作回数を共変量とする共分散分析

d) 共分散分析より推定された最小二乗平均値から計算した部分発作回数減少率（%）

副作用発現頻度は、ラコサミド錠群で 47.7%（173/363 例）であった。主な副作用は、浮動性めまい 22.9%（83/363 例）、傾眠 8.8%（32/363 例）、複視 4.4%（16/363 例）であった。

#### 17.1.4 国際共同長期継続投与試験（成人）

国際共同第Ⅲ相試験（併用療法）を完了した日本及び中国の患者 473 例（日本人患者 123 例を含む）を対象として、ラコサミド錠 100～400mg/日を 1 日 2 回に分けて経口投与したとき（中間報告、最長 767 日投与）、先行試験の観察期間からの 28 日あたりの部分発作回数減少率の中央値は 55.23%、50%レスポンス率は 56.3%（265/471 例）であった<sup>27)</sup>。副作用発現頻度は、ラコサミド錠群で 42.9%（203/473 例）であった。主な副作用は、浮動性めまい 17.8%（84/473 例）、傾眠 5.7%（27/473 例）、頭痛 3.8%（18/473 例）であった。

#### 17.1.5 海外第Ⅲ相試験（小児）

既存の抗てんかん薬で十分な発作抑制効果が得られない部分発作を有する 4 歳以上 17 歳未満の小児てんかん患者 343 例を対象として、ラコサミド（体重 30kg 未満の患者は 8～12mg/kg/日、体重 30～50kg 未満の患者は 6～8mg/kg/日、体重 50kg 以上の患者は 300～400mg/日）又はプラセボを 16 週間経口投与（既存の抗てんかん薬 1～3 剤との併用）したとき、主要評価項目である観察期間に対する維持期間の 28 日あたりの部分発作回数変化量は下表のとおりであり、プラセボ群とラコサミド群との間で統計学的に有意な差が認められた<sup>28)</sup>。

|        | 例数 <sup>a)</sup> | 28 日あたりの部分発作回数の変化量 <sup>b)</sup> | p 値 <sup>c)</sup> | プラセボ群に対する減少率 <sup>d)</sup><br>[95%信頼区間] |
|--------|------------------|----------------------------------|-------------------|-----------------------------------------|
| プラセボ群  | 170              | -1.55                            |                   |                                         |
| ラコサミド群 | 170              | -3.05                            | 0.0003            | 31.72<br>[16.342, 44.277]               |

a) Full Analysis Set

プラセボ群の 2 例は、維持期間の発作回数データに欠測（発作日誌の項目の 10%超）があったため、解析に含めなかった

b) 中央値

c)  $\ln(X+1)$ （X は部分発作回数）で対数変換した部分発作回数を用い、投与群、併合した実施医療機関を因子とし、対数変換した観察期間の 28 日あたりの部分発作回数を共変量とした共分散分析

d) プラセボ群に対する減少率（%）=  $100 \times \{1 - \exp(\text{最小二乗平均のラコサミド群とプラセボ群の差})\}$

副作用発現頻度は、ラコサミド群で 33.9% (58/171 例) であった。主な副作用は、傾眠 14.0% (24/171 例)、浮動性めまい 8.8% (15/171 例) であった。

#### 17.1.6 国際共同第Ⅱ相長期継続投与試験 (小児)

4 歳から 17 歳の直接登録された小児てんかん患者 136 例 (日本人 46 例、外国人 90 例) を対象として、ラコサミド 12mg/kg/日 (体重 50kg 以上の患者は 600mg/日<sup>注5)</sup>) を 1 日 2 回に分けて経口投与したとき、観察期間からの全治療期間における部分発作回数変化率の中央値は -52.73% (日本人で -27.63%、外国人で -60.56%) であった<sup>29)</sup>。副作用発現頻度は、56.2% (77/137 例) であった。主な副作用は、浮動性めまい 20.4% (28/137 例)、傾眠 19.7% (27/137 例)、振戦 8.0% (11/137 例) であった。

注5) 本剤の承認された 1 日最高用量は、成人及び体重 50kg 以上の小児には 400mg、体重 30kg 以上 50kg 未満の小児には 8mg/kg、体重 30kg 未満の小児には 12mg/kg である。

#### 17.3 その他

##### 17.3.1 心電図に対する影響

健康成人 214 例にラコサミド 400mg/日、800mg/日<sup>注6)</sup>又はプラセボを 1 日 2 回に分けて 6 日間反復経口投与、又はモキシシロキサシン 400mg/日を 1 日 1 回 3 日間反復経口投与したとき、ラコサミドは QTc 間隔を延長しなかった。ラコサミド群の PR 間隔の平均変化量は第 6 日目の投与 1 時間後に最大となり、プラセボ群との差は、400mg/日で 7.3ms、800mg/日<sup>注6)</sup>で 11.9ms であった<sup>30)</sup> (外国人データ)。

注6) 本剤の承認された 1 日最高用量は 400mg である。

#### 18. 薬効薬理

##### 18.1 作用機序

ラコサミドは電位依存性ナトリウムチャネルの緩徐な不活性化を選択的に促進し、過興奮状態にある神経細胞膜を安定化させることによって抗けいれん作用を示すと考えられている<sup>31)</sup>。

##### 18.2 てんかん発作に対する作用

ラコサミドは聴原性発作マウス、扁桃核キンドリング発作マウス、海馬キンドリング発作ラット、6Hz てんかん発作マウス及び最大電気ショック発作 (マウス、ラット) の部分発作及び全般発作を反映した動物モデルにおいて発作を抑制した<sup>32)</sup>。

##### 18.3 抗てんかん原性作用

扁桃核電気刺激キンドリングラットにおいて、キンドリング形成を抑制した<sup>33)</sup>。

#### 19. 有効成分に関する理化学的知見

##### 一般名

ラコサミド (Lacosamide)

##### 化学名

(2*R*)-2-Acetamido-*N*-benzyl-3-methoxypropanamide

##### 分子式

C<sub>13</sub>H<sub>18</sub>N<sub>2</sub>O<sub>3</sub>

##### 分子量

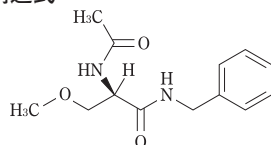
250.29

##### 性状

白色～淡黄色の粉末である。

メタノールに溶けやすく、エタノール (99.5) にやや溶けやすく、水にやや溶けにくく、ヘプタンにほとんど溶けない。

##### 構造式



#### 21. 承認条件

医薬品リスク管理計画を策定の上、適切に実施すること。

#### 22. 包装

100g [瓶、バラ、乾燥剤入り]

#### 23. 主要文献

- 1) 厚生労働省：重篤副作用疾患別対応マニュアル 薬剤性過敏症候群
- 2) 岡垣琢也, 他：薬理と治療. 2015 ; 43 : 1307-1316

- 3) 外国人健康成人におけるラコサミド反復投与時の薬物動態 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.6.3.3)
- 4) 日本人及び外国人小児患者における母集団薬物動態解析 (ビムパットドライシロップ/錠：2019 年 1 月 8 日承認、申請資料概要 2.7.2.2.2、2.7.2.2.3、2.7.2.3)
- 5) 岡垣琢也, 他：薬理と治療. 2018 ; 46 : 1331-1338
- 6) 社内資料：生物学的同等性試験 [DS10%]
- 7) 外国人健康成人におけるラコサミドの薬物動態に及ぼす食事の影響 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.6.1.1)
- 8) 寺田清人, 他：臨床精神薬理. 2018 ; 21 : 1223-1234
- 9) 血漿たん白結合率 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.2.2.1.1)
- 10) 代謝 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.2.3.3)
- 11) 排泄 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.2.3.4)
- 12) Cawello W, et al. : Eur J Drug Metab Pharmacokinet. 2012 ; 37 : 241-248
- 13) Cawello W, et al. : Clin Pharmacokinet. 2013 ; 52 : 897-906
- 14) 腎機能の低下がラコサミド単回経口投与時の薬物動態に及ぼす影響の検討 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.6.4.4)
- 15) 外国人肝機能低下者における薬物動態 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.6.4.5)
- 16) Schaefer C, et al. : Clin Drug Investig. 2015 ; 35 : 255-265
- 17) 年齢差及び性差がラコサミド単回及び反復経口投与時の薬物動態に及ぼす影響の検討 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.6.4.1)
- 18) 薬物相互作用試験 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.6.4.5、2.6.4.7)
- 19) Cawello W, et al. : J Clin Pharmacol. 2010 ; 50 : 459-471
- 20) Cawello W, et al. : Clin Drug Investig. 2014 ; 34 : 317-325
- 21) ミダゾラムとの薬物相互作用 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.6.5.9)
- 22) Stockis A, et al. : Epilepsia. 2013 ; 54 : 1161-1166
- 23) ラコサミドに関する母集団薬物動態解析 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.2.2.5.2)
- 24) 部分発作単剤療法の国際共同実薬対照試験 (ビムパット錠：2017 年 8 月 25 日承認、審査報告書)
- 25) 部分発作併用療法から単剤療法への切り替え試験 (ビムパット錠：2017 年 8 月 25 日承認、審査報告書)
- 26) 日本及び中国における部分発作併用療法のプラセボ対照比較試験 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.6.7.1)
- 27) 日本及び中国における部分発作併用療法の長期継続投与試験 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.7.6.8.1)
- 28) 小児患者を対象とした部分発作併用療法のプラセボ対照比較試験 (ビムパットドライシロップ/錠：2019 年 1 月 8 日承認、申請資料概要 2.7.3.2、2.7.6.3.1)
- 29) 小児患者を対象とした部分発作併用療法の長期継続投与試験 (ビムパットドライシロップ/錠：2019 年 1 月 8 日承認、申請資料概要 2.7.6.4.1)
- 30) Kropit D, et al. : Acta Neurol Scand. 2015 ; 132 : 346-354
- 31) Errington AC, et al. : Mol Pharmacol. 2008 ; 73 : 157-169
- 32) 効力を裏付ける試験 (ビムパット錠：2016 年 7 月 4 日承認、申請資料概要 2.6.2.2)
- 33) Brandt C, et al. : Epilepsia. 2006 ; 47 : 1803-1809

#### 24. 文献請求先及び問い合わせ先

共和薬品工業株式会社 お問い合わせ窓口

〒530-0005 大阪市北区中之島 3-2-4

☎ 0120-041-189

FAX 06-6121-2858

26. 製造販売業者等

26.1 製造販売元

共和薬品工業株式会社

大 阪 市 北 区 中 之 島 3 - 2 - 4